

モンゴル国紀行

I. かの国のシベリア鉄道の記

江戸ソバリエ協会 理事長
ほしひかる

全麺協の中谷理事長から、お誘いをいただきモンゴル国を初めて訪れました。期間は2025年7月16日から7月23日の1週間、一緒した仲間は約40名。皆さんと親しくなれて、楽しい旅行でした。旅の仲間の皆さまにあつく御礼申し上げます。



写真左《在日モンゴル国大使館の方と、ソバリエ4名(右から、柏倉寛充様・ほしひかる・松本行雄様・五十嵐幸也様)》

写真右《B. バヤルサイハン駐日モンゴル国特命全権大使様》

お声がかかったとき、その気になったのは、実は「シベリア鉄道泊」の予定が入っていたからでした。

とくに鉄道ファンというわけではありませんが、数十年もの昔の夜汽車の旅が思い出されたのです。

九州から東京へ出て来た学生時代、当時は新幹線はまだ走っていませんでしたから、夏と冬休みの帰郷には夜行列車「雲仙西海」、か、寝台特急列車「さくら」で行き来していました。

急行「雲仙西海」は東京駅午前10:30発でした。午前5:10に下関駅から懐かしの九州入りをします。そして故郷佐賀駅のホームへ朝7:51に降り立ち、生まれ故郷の空気を思い切り吸ったものでした。なにしろ座席に21時間20分座ったままの夜行(急行)列車です。でも当時の列車の旅は、若者も大人も、男も女も、すぐ仲良くなっていました。出会った人の話を笑いながら、驚きながら聞き、本でも読むようにその人たちの人生を想像したりしたものでした。

東京に戻るときは、運賃は親に出してもらえますから、格上の特急「さくら

㍿ の寝台列車に乗ることができました。佐賀駅発夕方 18:57⇒東京駅着翌朝 11:27、16 時間 30 分の夜行寝台列車です。急行列車と比べようもなくリッチな気分が安堵して眠れました。ただ当時の運賃は幾らだったんだろうと思うことがありますが、残念ながら忘れてしまいました。

そんな夜汽車の旅を久しぶりに体験したい。そう思ってモンゴル国行きに参加しました。

ところで、「シベリア鉄道」というのは、一般的にロシアの東西約 9,300 km (モスクワ⇒ウラジオストック) を 7 日間かけて横断する世界一長い鉄道のことで、本来はモンゴル国は走っておりません。しかしながら、乗車したときにもらった紙コップには「モンゴル・ロシア合資会社 ウランバートル鉄道」と書いてあります。そうです。ロシアのナウシキ駅から中国のエレンホト駅までのモンゴル国縦断鉄道はウランバートル鉄道であり、「シベリア鉄道」というのは通称ということになるのです。



《シベリア鉄道(青線)とモンゴル縦貫鉄道(赤線)》



《ウファ駅》



《ウランバートル⇒エルデネト駅》

それはともかくとしまして、7 日間も要するシベリア鉄道には史上多くの日本人が利用しています。そのなかで私たちにとって興味深いのが、徳富蘆花です。

彼は 1906 年(明治 39 年)4 月に横浜港を出発し、聖地バレスチナを巡礼、6 月にロシアのヤースナヤ・ホリャーナ(トゥーラ市近郊)を訪れて、トルストイに会って、彼の館で 5 日間暮らし、そしてシベリヤ鉄道で日本へ帰国していますが、

途中のウファ駅を過ぎたあたりで蕎麦の花を見ているのです。

蘆花の歌に、世界で一番蕎麦を生産しているところの景色が垣間見れるというわけです。

蕎麦雪に 似たるウラルの 山畑に 紅衣の翁 独り耕す
(蘆花)

さて、私たちはモンゴル国の首都ウランバートル駅を夕方 18 時 55 分に出発しました。目指すはエルデネト駅(オルホン県)、到着は翌朝 8 時 30 分の予定。異国を 13 時間 25 分走る夜汽車の旅です。ちなみにモンゴル国は 21 県 347 郡 1681 村から成っているそうです。オルホン県というのはその一つです。

寝台は 1 部屋に 4 つ、すなわち 2 段ベッド×2 列となっていますから、4 人部屋になります。ただし私たち一行は 1 部屋 2 名で使用、私は埼玉の K さんと同室でした。日本旅行社の担当者さんに運賃を尋ねましたところ、4 名 1 室の料金で、日本円にすると 12,600 円、一人あたりは 3,150 円でいどらしいです。

トイレは都市周辺では使用できません。線路に落として走り去るからです。

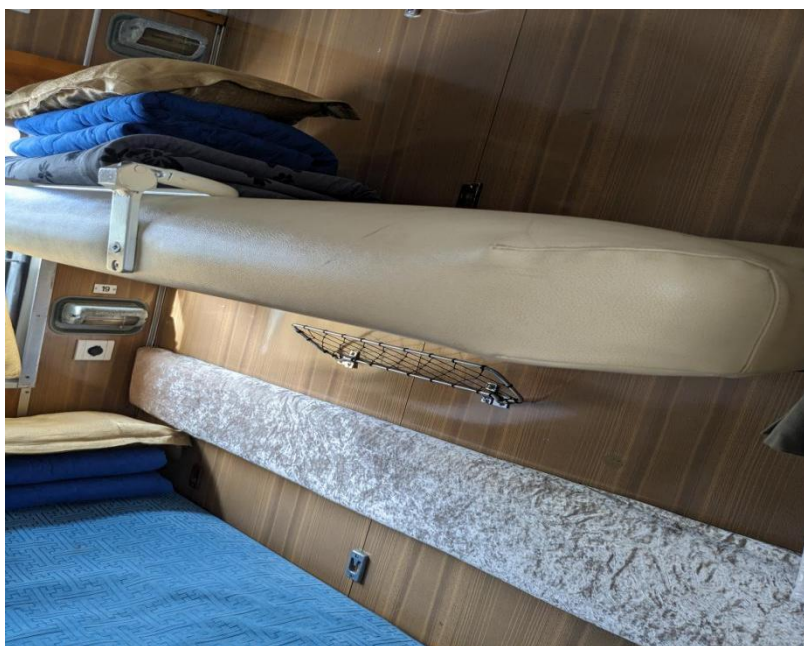
《ウランバートル駅》



《ウランバートル・スパートル UBTZ1001》



《車内用紙コップ》



《寝台》



《車窓から：珍しく川の景色》

走り去る窓の景色は草原、草原、また草原。なにしろこの国は日本の国土の約4倍、しかも国土の八割は草原なのです。日本の景色のように海も河もありません。山も谷もありません。ただ草原だけが続きます。

その草原も、草叢ではありません。ゴルフ場のラフていどの短い草が続きます。退屈かもしれませんが、かえって私たち日本人の目には珍しい景色です。

ン！ 先ほど河がないと言いましたが、細い川が流れている所に来ました。私たちは一条の光のように目を奪われました。すると水辺の草は丈があり、木々も生えているのです。ただし木の背丈は高くありません。また水辺の草は緑の

色も濃いのです。車窓の景色の変化は、“水”の力を私たち教えるかのようにしばらく続きました。Kさんと私は、“生命”を觀た感動に胸を詰まらせ、そしていつの間にか睡魔にとらわれていました。

翌朝、一行はエルデネト駅(オルホン県)から貸切バスで目的地のバヤン・アグト郡(ボルガン県)へ向かいます。

以 上

〔写真〕

地図はネットより

〔参考〕

徳富健次郎『巡礼紀行』（中公文庫）